経済学論集83-2・3（2022.1）

《書　　評》

Shinji Nohara

Commerce and Strangers in Adam Smith

Springer, 2018

１．本書の概要

18世紀はヨーロッパ諸国を中心として経済のグローバル化が急速に進展した時代であった．本書は経済学の父として知られるアダム・スミスが，18世紀に進展した経済のグローバル化をどのように捉えたかを解明することを主題としている．本書のキー概念は，タイトルにもある「見知らぬ人（strangers）」である．見知らぬ人とは「同じ社会あるいは同じ社会背景に属さない人」（p.3，以下ページ数のみ記す）であり，「この書物はスミスが見知らぬ人との遭遇についてどのように考えたかを解明する」（10）ことを主題としている．

本書は９章から構成されている．以下ではまず各章の概要と注目すべき点について紹介する．第１章では上述の主題を提示したあと，本書の方法について，「インテレクチュアル・グローバル・ヒストリーとコンテクスト主義の両方のアプローチを採用する」（15）と述べている．グローバル・ヒストリーとしての本書の問題点については後述する．本書は第２章と第４章でコンテクスト分析に主眼が置かれているものの他章はテキスト分析にも力が注がれており，書物全体としてはコンテクスト分析とテキスト分析の両立を意図しているというほうが実状に近いように思われる．

第２章はこれまでの研究史でほとんど注目されてこなかったスミスの蔵書（その一部は東京大学に所蔵されている）の構成を詳細に検討して，スミスが同時代の旅行記や宣教師報告から多くの情報を得てかれの理論を組み立てていたことを明らかにしている．17世紀の自然法学者たちが聖書と古代の古典を材料にしたのに対して，スミスに代表される啓蒙思想家たちは旅行記に依拠して世俗的で経験的な歴史認識を形成した．著者がとくに注目するのは，スミスが北米インディアンに関する旅行記から歴史的４段階論の第１段階（狩猟社会）の未開人イメージを形成したことや，東インド会社の関連文献から『国富論』における東インド会社批判の材料を得ていたことである．

第３章は『道徳感情論』を分析している．本書のもっとも独創的な解釈の１つは，スミス道徳論の基本概念である「見知らぬ人」と「公平な観察者」を重ね合わせて解釈したことである．見知らぬ人と公平な観察者は本来は異なる概念である．『道徳感情論』第１部に登場する見知らぬ人は，家族や友人などの親密圏の身近な人とは異なり特別の関係を持たない人であって，商業活動で出会う街頭の見知らぬ人に代表される．スミス研究史では，水田洋が見知らぬ人と自己規制の関連を指摘したことがよく知られている．当事者が家族や友人に共感されるためにはわずかな自己規制で十分であるのに対して，街頭の見知らぬ人に共感されるためには大きな自己規制を必要とするのである．一方，公平な観察者は『道徳感情論』第２部正義論から登場し，正義と不正を判断するときに加害者と被害者の一方に偏することなく両者を公平に判断する第３者としての観察者を意味する．

では著者は，見知らぬ人と公平な観察者の関係をどのように考えるのであろうか．本書では，「見知らぬ人の眼で見るときに公平な観察者になる」（66）とか，「公平な観察者は他者を見知らぬ人のように見る」（68）と述べられている．つまり著者は，見知らぬ人と公平な観察者は，観察者としての視点が一致すると考えている．一般的に言って，正義の判断では加害者や被害者の家族・友人は，自分の関係者に有利な判断つまり不公平な判断をしがちであり，それゆえ家族でも友人でもない見知らぬ人のほう

が正義を判断する公平な観察者にふさわしい．このように考えるならば，見知らぬ人と公平な観察者を重ね合わせる本書の解釈はかなり説得的であるように思われる．今後スミスのテキストに即してのさらなる検証が望まれる．

本書の独自な解釈はそれだけではない．本書は見知らぬ人と公平な観察者をグローバル社会の中に置いて考える．スミス自身の用例では，見知らぬ人はローカルな社会で考えられていることが多い．他方で『道徳感情論』第３部には国際的な公平な観察者に言及した記述があり，『法学講義』国際法論でも中立国デンマークの国民が英仏両国民を公平に判断する例があげられている．堂目卓生の先駆的研究（『アダム・スミス』中公新書，2008年）は『道徳感情論』に登場する国際的な公平な観察者に注目したが，本書はその解釈をいっそう推し進めて国際的な見知らぬ人の意義を強調している．

さらに著者は，一般規則と見知らぬ人との関係についても非常に問題提起的で大胆な解釈を提示している．著者によれば，スミスの一般規則論はローカルなコミュニティに生きる人々が，想像力によって見知らぬ人の眼で見ることを通じてユニバーサルな視点と道徳規則を形成できることを示すものであり，現代世界におけるローカルとグローバルの対立をどのように乗り越えるかという問題や，政治哲学におけるロールズとコミュニタリアンの論争を解決する方法を示唆するものであるという（69）．

第４章は，18世紀の封建社会論争におけるスミスの主張とその意義を検討している．18世紀のスコットランドでは，封建制から近代への移行をめぐって，ケイムズ，ダルリンプル，ヒューム，スミスらによる歴史論争が遂行された．本書は論争の主要論点と経緯をていねいに整理しつつ，近代的自由の成立を重視したスミス歴史論の構造を浮き彫りにしている．本書の指摘でとくに興味深いのは，スミスによる絶対君主と専制君主の区別である．両者はしばしば同一視されていたのに対して，スミスは君主制が専制となるかどうかは法の支配の有無によると考え，ブリテンの絶対君主は貴族権力を抑制して法の支配と民衆の自由をもたらしたので専制君主と区別していたという．

第５章は，『道徳感情論』における道徳の一般規則論を検討している．スミスの説明によれば，人々は一方で共感の反復から道徳の一般規則を帰納的に形成し，他方では既存の一般規則に合わせて自己の感情と行為を抑制する．つまり個人の共感と社会の一般規則は双方向に影響を及ぼし合っている．これに対して本書第５章は，共感と一般規則の関係を不規則性と規則性の関係として解釈する（93）．情念の不規則性への注目は新しい着眼であるが，本書の解釈では不規則な共感が既存の道徳規則に規制される保守的側面だけが強調されており，時代の変化とともに人々の新しい共感から新しい道徳規則が形成される進歩的側面が顧慮されていない点は疑問が残る（これこそスミスが『法学講義』で重視した点であった）．

第６章は，ヒュームとスミスの貨幣数量説を比較している．ヒュームは貨幣需要が一定である短期を仮定して貨幣供給と物価の比例関係を主張したのに対して，スミスは貨幣需要と貨幣供給の両者が変動する長期の物価変動を論じた点が異なるという対比はよく理解できる．

本書はそれに加えて，スミスが貨幣の中立性を支持せず，貨幣供給が物価だけでなく実体経済にも影響すると考えていたと主張している（114）．しかしその理由がわかりにくい．一般的に言えば，貨幣供給と実体経済との関係にはいろいろな経路がありうる．商品生産の発展にともなって商品流通に必要な貨幣量が増加するときには，貨幣供給の増加は商品経済を発展させる．また銀行券の発行も流通必要貨幣量以下であれば金銀貨などの実物貨幣を節約するので実体経済にとって有益である．しかし一般的には，貨幣の中立性の否定はヒュームの連続的影響説のようにケインズ的な総需要拡大政策の先駆的見解を意味することが多い．本書がスミスは貨幣の中立性を否定したと主張するのであれば，その論理をもっと明確に述べることが望まれる．著者は（明言しているわけではないが），スミスの貨幣論を現代日銀のリフレ政策の先駆者として解釈しようとしているのかもしれない．いずれにせよ本章は今後いっそうの研究の進展が期待される．

第７章は，スミス価格論がたんなる抽象的理論ではなく現実の市場の制度や慣行に即したものであったことを経済史文献の検討によって示し，さらにスミスがマーシャルの部分均衡論に類似した部分均衡動学を主張したという解釈を述べている．

第８章は，スミスの国際貿易論を考察している．リカードの比較生産費説以来の主流派貿易論が供給側を重視するのに対して，著者はスミスが外国貿易商人による販路拡大と輸入増加による国内消費拡大を重視する需要主導型貿易論を提唱したという．これも非常にユニークな解釈であり賛否は分かれるであろう．

２．重商主義批判と経済学の成立をめぐって

以上，本書の概要と貢献について紹介してきた．本書は「商業と見知らぬ人」をキー概念としてスミスの著述の全体を再解釈し，グローバル化の時代を生きたスミスという新鮮なスミス像を提示することに成功している．膨大なスミス研究文献を渉猟するほか周辺領域の関連文献を広く参照して提起される解釈は知的刺激に富んでいる．上記で各章を紹介しながら個別的論点についてコメントしたので，以下では本書全体に関わる論点を２つ述べる．

第１の問題は，スミスの重商主義批判をどのように考えるべきかである．本書はスミスの重商主義批判にほとんど言及していない．経済学史のどの教科書にも書かれている周知の事実であるから，あえて言及するまでもないと考えたのかもしれない．一般的に言えば，専門的研究書が教科書的説明を省くのは当然である．しかし本書の中心テーマであるグローバル化に対するスミスの対応について考察するためには，かれの重商主義批判の検討を避けて通るわけにはいかないように思われる．というのも，17－18世紀のヨーロッパ諸国において経済グローバル化に対応する支配的政策が重商主義であり，それを批判して自由貿易へ転換することがスミスにとって最大の歴史的課題だったからである．

本書ではしばしばグローバル化と一国主義とが対置され，スミスはグローバル化の問題に正面から向かい合って旧来の一国主義的で狭隘な理論的視座を克復したかのように描かれている（10）．しかしながら当時のブリテンにおいて，またスミス自身にとっても，基本的対立軸はグローバル化と一国主義ではなかった．幕末期の日本であれば，対外政策の基本的対立軸がグローバル化（開国）と一国主義（鎖国）であったと言えるかもしれない．しかしスミスの時代のヨーロッパ諸国における政策の焦点となった重商主義と自由主義の対立は，一国主義とグローバル化の選択ではなく，グローバル化への対応をめぐる２つの国家戦略の選択であった．

本書はしばしばグローバル化がそれ自体としてつねに善いものであるかのように論じている．しかしスミスにとっては，諸国民に有害なグローバル化（重商主義）と有益なグローバル化（自由主義）の選択こそが根本問題であった．重商主義は自国の貿易差額を最大化することをめざす点では自国中心主義でありつつも，その目的を達成する手段として重視したのは保護関税や輸出補助金だけでなく何よりも植民地拡大であった．英仏両国は18世紀に植民地支配の覇権を賭けてヨーロッパ諸国を巻き込んで全世界を舞台とする重商主義戦争をくり返したのであり，これこそスミスが対決したグローバル化の現実であった．

ここで経済グローバル化に対するスミスの対応と重商主義批判を分離できないことを，本書第２章の問題について指摘しておこう．第２章では，スミスが世界各地の旅行記や宣教師報告の中でも，とくに北米とインドに大きな関心を寄せたことが考察されている．スミスの関心は全世界に及んでおり，かれは著作の中で日本，中国，モンゴル，中南米，アフリカなどにも言及している．しかしその中でとくに北米とインドに対する関心がきわだって大きかった理由について本書は触れていない．スミスの両地域に対する関心は，重商主義批判と密接に関連していた．上述のように，英仏両国は18世紀に３回の重商主義戦争を遂行した．ヨーロッパ諸国を巻き込んだ大陸での戦争（スペイン継承戦争，オーストリア継

承戦争，７年戦争）とほぼ同じ時期に，英仏両軍は植民地支配の覇権を賭けて北米とインドで３度も衝突した．英仏両軍の北米とインドにおける戦闘の状況は本国にもたびたび伝えられ国民的関心事となっていた．つまりスミスの両地域に対するきわだって大きな関心はたんなる知的好奇心によるものではなく，かれの重商主義批判と密接に関連していたのである．

また，本書第６，７，８章で述べられている貨幣，価格，国際貿易論についても，著者は理論的含意の検討に主眼を置いている（それ自体は非常に刺激的で興味深いことは指摘した）．しかしスミスは，本来は重商主義を批判して自由貿易を主張するためにこれらの理論を彫琢したことが忘れられてはならないであろう．そのことは以下で述べる第２の問題にも関連している．

第２の問題は，「経済学の成立」である．従来のスミス研究において，経済学の成立問題，すなわち，スミスは，いつ，なぜ，いかにして経済学という新しい学問を成立させたのかという問題が，重要な研究テーマとなってきた．これに対して著者は第１章で，「本書は商業社会または文明社会の概念に注目するが，それは経済学の成立という観点からではなく，スミスがグローバル化にどのように直面したかという観点からである」(22) と述べている．つまり本書において，スミスにおける経済学の成立とグローバル化への対応は切り離して考察可能と考えられている．しかしスミスによるグローバル化への対応の帰結こそ経済学の成立だったのではないか．言いかえれば，スミスは経済学を成立させることによってグローバル化の問題に応答したのではないのか．以下その点について説明する．

スミスにおける経済学の成立を考察する上でとくに重要なのは，価格論と貨幣論の法学からの分離である．近代自然法学やハチスンの道徳哲学体系では，価格論と貨幣論は私法論の契約論の中で考察されていた．というのは，当時の契約訴訟では価格や貨幣に関するものが非常に多かったからである．スミス自身も初期の法学講義では，近代自然法学者やハチスンと同様に，価格論と貨幣論を契約論の一部として考察していた．しかしミークが考証したように，スミスはある時点で価格論と貨幣論の大部分を法学の契約論から分離して富裕の進歩論の直前へ移動させる．こうして価格論と貨幣論を基礎として労働と資本の自然的配分と富裕の進歩を論ずるスミス経済学の理論的骨格が成立した．

そもそもスミスが価格論と貨幣論を法学から分離したのは，重商主義政策批判のためであった．スミスは，価格論で保護関税や輸出補助金が市場価格を自然価格から乖離させることを批判し，貨幣論で貿易差額を政策目的とすることを批判して，自由貿易政策を理論的に基礎づけている．つまりスミスは，ヨーロッパ諸国でグローバル化に対応して実行されていた重商主義政策を批判して自由貿易政策へ転換することを理論的に基礎づけるために，かれの経済学を成立させたのである．

このような意味で，スミスにとっては，グローバル化への対応と重商主義批判と経済学の成立はいわば三位一体の関係にあった．本書のように，スミスのグローバル化への対応を重商主義批判や経済学の成立と分離して考察すると，スミスの経済学が本来めざした目的や歴史的背景から切り離されてしまいその意義が十分に捉えられないように思われる．本書はグローバル・ヒストリーとコンテクスト主義を基本的方法とすることを明言しているのだから，重商主義批判や経済学の成立などの歴史的・理論的コンテクストへの配慮がもう少しなされてもよいと思われる．今後は各章に示された斬新な解釈をより広いコンテクストの中に位置づける研究の進展を期待したい．

〔新村　　聡〕

書評執筆者

新村　　聡　岡山大学社会文化科学研究科特命教授